

The Church at Home and Abroad (1)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回(2023年2月号)は、明治期に横浜で発行されていた3大英字新聞の1つ『Japan Weekly Mail』の1894年3月3日号に掲載された天理教に関する記事を紹介した。このころには日本で発行されていた英字新聞だけでなく、アメリカ、イギリスなどのキリスト教各派が機関誌で国外宣教の1つとして日本の状況を伝えているなかで、急速に伸展している新宗教の1つとして天理教に関する記事が散見されるようになっていた。前回紹介した記事は、その内容の大半が佛教学会発行誌『仏教』に掲載された天理教に関する記述を英語で要約したもので、いわば日本人の視点からの天理教紹介の英語版であった。一方、欧米諸国での出版物における天理教に関する記述には、欧米人独自の視点を含んでいるものもあり、外国人たち、特に執筆を担当したキリスト教宣教師たちが、どのように天理教を受け止めていたかをうかがうことができ、大変興味深い。

そのようななかから、今回と次回の2回にわたり、アメリカでGeneral Assembly of The Presbyterian Churchが発行していた月刊誌『The Church at Home and Abroad』Vol.XVI. No.94, (October 1894)に掲載された天理教に関する記述をみていきたい。この1894年10月号は全部で100頁ほどあり、プレスビテリアン派(長老派)の“Home Missions”(アメリカ国内での宣教:筆者拙訳、以下同様)と“Foreign Missions”(国外での宣教)について、さまざまな情報や報告記事が掲載されている。国外に関するニュースや報告の内容は、“Generosity of a Chinese Christian”(ある中国人キリスト教徒の寛大さ)、“Buddhist and Shinto Priests in Japan”(日本の仏教徒と神道神職)、“London Missionary Society”(ロンドン宣教師会)、“Missions in Persia”(ペルシャでの伝道)、“Difficulty of Evangelizing in Moslem”(ムスリムへの宣教の難しさ)など、多岐にわたっている。このような国外記事の1つとして、天理教は「THE TENRIKYO」という見出しで約1頁にわたり紹介されている。

執筆者はRev. J. B. Porterという人物で、天理教について、まず“This is the name of a new religion that is becoming very popular among the peasant class of Japan. It is said to number now more than two million adherents, though it is not more than ten years since it began to attract any attention.”(天理教というのは日本の農民階級の間で非常に流布している新宗教の名前である。注目されるようになってから10年に満たないが、現在200万人ほどの信徒がいると言われている。)と書き出している。続いて、教祖と神について、“It claims, as its founder, a woman who lived about forty or fifty years ago, named O-Miki. She is supposed to have received a number of revelations, in fact, to have been a kind of incarnation of the deity. Their god, Tenrio, is a combination of ten divinities, among whom are the sun, moon, and a number of the old gods of Shinto mythology.(創始者はオミキという名前の女性で、40、50年前に多くの啓示を受け、一種の神の化身となったとされる。彼らの神、テンリオは、十の神が複合されたもので、そのなかには太陽、月、そして神道神話の古い神々が含まれている。)”と説明している。

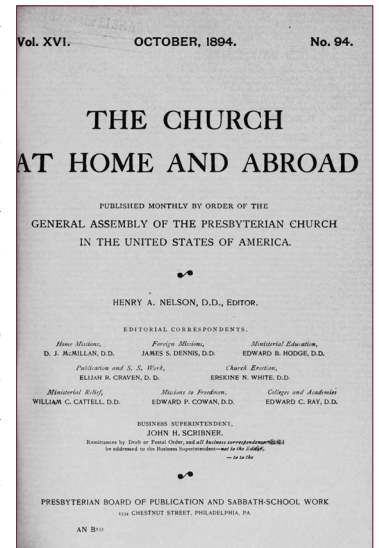
さらに、天理教では“sun and moon”(太陽と月)が“supreme creators”(最高の創造者)として崇拝されているとし、かつてはこれらの創造主は“the only beings in existence”(唯一の存在)であったが、やがて人間創造を決意し、“two beings, before unknown”(未知の2つの存在)である“a white dragon and a woman”(一匹の白い竜と一人の女性)を発見してこれらを“the model for man's body”(人間の身体モデル)とし、

“troubled as to how they could give him a soul”(いかにして人間に魂を与えるか苦心しながら)、最終的に「999,999,999」(原文ママ)の“whitebait”(シラス)を使って“the manufacture of one soul”(人間の魂を創造)したと説明している。

次いで、天理教は、“Among the ignorant only”(無知な人々の間のみ)ではあるものの急速に伸展しており、その教えについて、“It teaches repentance and forgiveness of sin, and has the reputation of much more austere in its morality than either Buddhism or Shinto. Its adherents claim that the Tenrikyo is very much like Christianity in its moral requirements, while it is superior to the latter in not requiring the rejection of all other faiths.”(天理教は罪への懺悔と赦しを説き、道徳規範に関しては仏教や神道よりはるかに厳格であることで知られている。天理教は道徳的要求においてキリスト教に非常に似ているが、他の信仰を否定しない点でキリスト教より優れている、と信徒たちは主張している。)と記述している。

そして、天理教が受け入れられている要因を、“The Tenrikyo (Teaching of Heavenly Truth) wins popularity by insuring good luck in the shape of deliverance from sickness, earthquakes, fires and pestilence.”(病気、地震、火災や疫病からの解放というかたちでの幸運を保証することで、天理教(天の真理の教え)は評判になっている)と説明し、2人の貧しい女性の救済例を挙げて、“It teaches a kind of faith-cure.”(この教えは一種の信仰療法を説く)と述べている。しかしその一方でこれに関して、“Physicians claim that persons of this faith frequently die because they refuse to take proper remedies, relying upon the prayer of faith to save them.”(医者たちは、この信仰者たちは救済を祈りに頼り、適切な治療を拒否するため、亡くなることがしばしばある、と主張している)と、医療関係者からの危惧の声を伝えている。

次号では、天理教信者たちの信仰実践の様子や天理教の急速な進展にみる日本の宗教事情などについて記述している後半部分を紹介したうえで、この記事の特徴について考えてみたい。



『The Church at Home and Abroad』
Vol.XV. No.94, October 1894の表紙